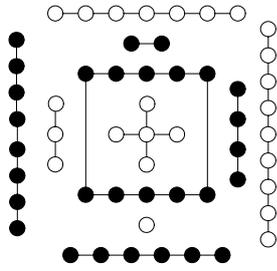


圖



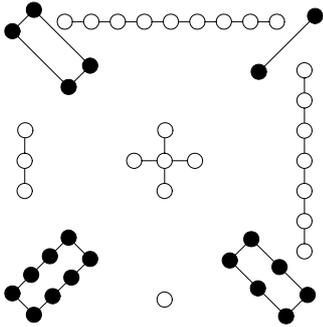
易經「繫辭伝」

「河、圖を出し、洛、書を出して、聖人之に則る」

史記本紀、三皇本紀 伏羲氏に「龍瑞有り」の記述あり。龍馬が圖を負うて黄河から出たと注される。「伏羲は蛇身人首にして聖徳有り。仰ぎて象を天に觀、伏して法を地に觀、あまねく鳥獸の文と地の宜を觀、近く諸を身に取り、遠く諸を物に取り、始めて八卦を画し、以って神明の徳に通じ、以って万物の情を類す。」とされる。

書經の顧命に河圖の記述があり、孔安国の伝によれば、この龍馬の背負うた圖が左図で、これにより伏羲が八卦をつくり、河圖と称されるようになった。

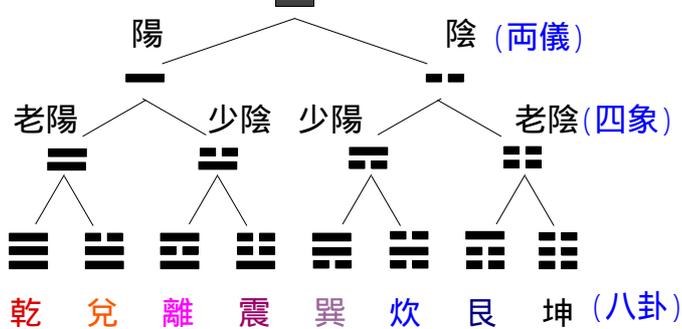
書



書經の洪範に「天すなわち禹に洪範九疇を錫(あた)う。彝(不変の) 倫攸(すなわち) 叙す(秩序だつ)。初めの一に曰く、五行。次の二に曰く、五事を敬用す。次の三に曰く、八政を農用す。次の四に曰く、五紀を協用す。次の五に曰く、皇極を建用す。次の六に曰く、三徳を乂用す。次の七に曰く、稽疑を明用す。次の八に曰く、庶徴を念用す。次の九に曰く、五福を嚮用し、六極を威用す。」孔安国の伝によれば、洛書は洪範九疇をさす。洛水に背に文様のある神亀が現われ、九の数字が記されていた。禹はそれに基づいて、五行以下九の秩序をあきらかにし、その後、夏や殷に代々洛書として伝えられた。

易

太極



白と黒は、奇数と偶数、陽と陰でもある。男と女、動と静、剛と柔、天と地、昼と夜、仁と義、日と月、福と禍、等々。

陽極まると陰となり、陰極まると陽となるものが太極。

太極、兩儀を生じ、兩儀、四象を生じ、四象、八卦を生ず。

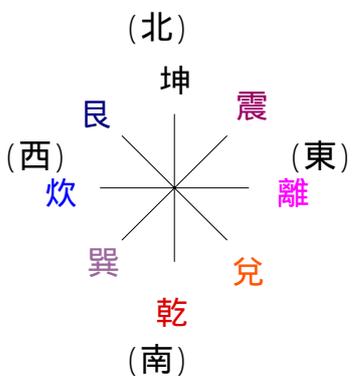
東、南、西、北(四方)は春、夏、秋、冬(四季)。中央があつて五となる。

五はまた、木、火、土、金、水。

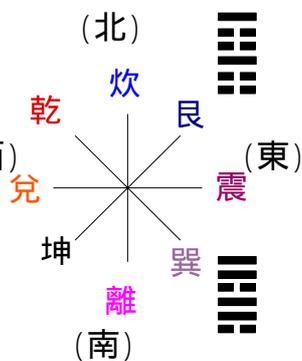
方位は八方位、これに中央を加えると九。九州とは全土の義。

数は一から九。

伏羲八卦



文王八卦



乾 兌 離 震 巽 坎 艮 坤は  
天 沢 火 雷 風 水 山 地であり  
健 說 麗 動 入 陷 止 順であり  
父 少女 中女 長男 長女 中男 少男 母でもある。

八卦と八卦を組み合わせ  
六十四卦を得る